

# 保育への視座(1)

## —若い保育者の方々へ—

河邊 純

ある幼稚園の研究会の席上で五歳児クラス担任の先生が、「Aちゃんは、日頃とつても細かいことによく気がつき、ものごとをよく観察し、よく考えることができる御子さんである。ある日ガラスの瓶にさしてあつた草花の茎から根が出ていたので、きっとAちゃんがこれを気付き根のことについていろいろ考え、そのことを何か話してくれるだろうと思つていた。期待通りAちゃんは根の出でい

るのを見つけて、じっと見ていたが、『先生、この草、根を出しているよ。きっと土のところで根を出したかったのだよね。』と言つたので、意外なことばに驚くと共に、なんというすばらしい発見の態度だらうと、発見と同時に草の心もちになれるような感じとり方に感動しました。』と話されて、先生方とあらためて子どもの感受性のすばらしさについて話し合つたことがある。

私もこれに触発されて思い出したことがある。それは、ある幼稚園の砂場で左手にスコップをもつて砂遊びをしている男の子を見つけて近づくとやにわに右手をつき出し、

「この虫どうして脚を動かしているか知っている？」と問い合わせて来た。よくみると親指と人さし指につままれて必死にもがいているかなぶんであった。とつさの質問に瞬間「昆虫の関節のことを説明してもわからないだらうし」と判断し、「おじさんわからないからぼく教えてよ」と言つた。とたんにはね返えつて来たことばが、「とびたがっているんだよ。」であった。私もその時の幼児の表情や声が今も鮮明に残っている程、幼児の感受性のすばらしさとそれがことばになつたそのことばにほんとうに感動したのである。

それ以来、幼児は感覚を通して全身で自分をとりまくいろいろなものや人などに向き

あつてゐるということ、そしてその時その場で向きあつた事実とその時その場の感受性を見逃さないように、また大切にしたいと思うようになつて來た。

同時にこうした幼児と出会うごとに、このような、すばらしい感受性をもつてまわりの環境に働きかけている幼児たちが、その後成長する間に、いつどこでどうしてこのすばらしい感性を弱め、退化させ、失つてしまつたのであろうかと考えるようになつた。

また、保育にあたつてゐるいないにかかわらず、私も含めて大人たちがこの感受する力をもう一度とりもどしたいと願うと共に、あるいは、ひょっとすると、幼児と一緒に生活するならば、弱くなったり、失いかけている私たちの感受性をとりもどしたり、みがきをかけることができるかも知れないとも思うようになつた。

幼児と生活を共にされている方々は、幼児が、どんな小さなものについても、その生命の働きにふれ、知る前に感じとっていることに気づかれているはずである。

そこで、このことに関連して、是非若い保育者の皆さんに、こうした体験の事例を数多く具体的に聞かしていただきたいとお願いするに同時に、このことに関連した本を是非読んでほしいとここに紹介したい。

それは、最近地球環境への告発の著書として世界のベストセラーとなつた『沈黙の春』の著者であるレイチエル・カーソン女史（アメリカの海洋生物学者）が病氣で亡くなる直前に、是非これを世の光にとまとめあげられた『センス・オブ・ワンダー』（佑学社）という本である。詩情溢れる美しい文章のすばらしさ（訳者上遠恵子さんの訳もすばらしく）に感動するだけでなく、彼女が、甥の

ロージャの母親が亡くなつた為に幼児時代をあずかり、一しょに森や海辺を散歩したり、夜空の星をながめて暮らしたロージャとの生活を書きしるし、世の人々に「あなたの子どもに驚異の目をみはさせてほしい」と訴えられていることに強い共感と共に鳴をおぼえるからである。

五十六歳で生涯を閉じられた彼女は、雑誌に発表したものこれを単行本としたいと願いながら間にあわなかつたのを、友人たちが死去の翌年アメリカで刊行され、日本では昨年六月に訳本として刊行されたということである。ところでこの著者は、本文のはじめから、訳者のあとがきまですべてを読み終えたとき、彼女の訴えたかったことの意味が感受でき、理解でき、さらに現実化したくなると信じるので、本文の抜粋については躊躇するのであるが、前述したことに関するところに

限つて、彼女の述べているところをここに抄述することにする。

「子どもといっしょに自然を探検するといふことは……それはしばらく使っていなかつた感覺の回路をひらくこと、つまり、あなたの目、耳、鼻、指先のつかいかたをもう一度学び直すことなのです。

わたしたちの多くは、まわりの世界をほとんど視覚を通して認識しています。しかし、目にはしていながら、ほんとうには見ていないことも多いのです。見すごしていた美しさに目をひらくひとつ的方法は、自分自身に問い合わせてみることです。」と、そして、

「たとえ、たったひとつの星の名前すら知らなくとも、子どもたちといっしょに宇宙のはてしない広さの中に心を解き放ち、ただよわせるといった体験を共有することはできるのです。そしていっしょに宇宙の美しさに酔

いながら、いま見ているものがもつ意味に思いをめぐらし驚嘆することもできるのです。」と、さらに、

「子どもたちが出会う事実のひとつひとつがやがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまなる感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壤です。幼い子ども時代は、この土壤を耕すときです。」と述べている。

「」で思いあたることがある。それは子どもたちが昆虫をつかんで来たり、草花を摘んで来たりすると、すぐ「それは何という名の虫か」「何という花か」をたずね、図鑑を与えて調べさせることを幼稚園・保育所や家庭の親たちまでがやっている。これは動植物研究の中の分類学的研究の「同定」という研究過程の一作業である。

「どんなところに、どのように棲息しているの？」とか、「どのように生育していた

の？」などと動植物の生態に关心や興味をもつようには誘導して来なかつたように思う。

地球環境の生態系が危機にさらされて來いる今日、世界に随分遅れをとつてゐるもうなづかれるのである。

それにもまして、幼児を育てるとき、この

ような分類学的、生態学的な関心のもたらせ方以前の問題として「神秘や、不思議さに驚嘆する感性」のところに、もつともつとかわり共有できるような保育の見直しが緊急の課題ではないでしょうか。

(元洗足学園短期大学)

